

監修

新村出
山岸德平

高木市之助
小島吉雄

久松潜一

宇津保物語

宮田和一郎校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

宮田和一郎（みやたわいちろう）

明治二十三年新潟縣生。大正九年

京都大學文學部卒業。池坊学園短

期大學教授。主著——頭註對譯源氏

物語、更級日記精講、校註篁日記、

成尋阿闍梨母集新釋、日本古典全

書・宇津保物語（一―五）等。

日本古典全書

「宇津保物語」三 宮田和一郎校註

昭和二十六年六月二十日初版發行

昭和四十一年三月三日第六版發行

印刷所 明善印刷株式會社

發行所 朝日新聞社（東京都千代田

區有樂町・大阪市北區中之島・

北九州市小倉區砂津・名古屋市

中區廣小路）

定價 四四〇圓

目次

凡 例 三

各卷にあらはれる人人 五

初 秋 七

田鶴の村鳥 八

本 文 九

初 秋 一名「とばかりの名月」又「相撲の節會」又「内侍のかみ」 九

一 兼雅正頼を訪ふ、力士の噂、女文の優劣 三

を論ず 三

二 正頼兼雅鵲を射る 六

三 相撲の節會の準備 九

四 朱雀院仁壽殿にて女御と物語し給ふ 三

五 正頼ら仁壽殿に参り年中の節會につきて 三

語る 三

五 藏 開（上） 七

六 藏 開（中） 八

六 正頼大宮と掣えらびの相談 三

七 仁壽殿の相撲の節 三

八 仲忠琴彈くべき勅うけてあて宮の局に逃 三

げ入る 三

九 仲忠あて宮の局にて兵衛と語る 三

一〇 仲忠見つけ出さる 三

一一 仲忠御前にまゐる 三

目 次 一

一 仲忠、母を迎へ参るべき勅を蒙る	六〇	彈く、尙侍に任ぜらる	七三
一三 仲忠、母を欺きて仁壽殿に伴なひまゐる	六六	一五 朱雀院螢の光にて俊蔭女を御覽す	七四
一四 朱雀院俊蔭女と御物語し給ふ、俊蔭女琴			
田鶴の村鳥 一名「沖の白浪」	一〇一		

一 朱雀院、涼の妻にすべき女のことを正頼に仰せられる	一〇三	五 臣の大饗	一〇七
二 正頼・大宮聲選びの相談	一〇四	五 あて宮より女一の宮に消息あり、仲忠夫妻あて宮の噂す	一一三
三 仲忠は朱雀院の女一の宮と、涼は正頼の十女今宮と婚す	一〇五	六 兵部卿宮正明・行正・藤英の四人正頼の聲になる	一二七
四 正頼十五夜に聲君たちを率ゐて参内す、仲忠・涼御前にて彈琴、人人昇進、任大		七 藤英の榮華、忠遠の恩にむくゆ	一三三
開（上）	一二九	八 正頼、仲頼に法服を贈る	一三九

一 仲忠俊蔭の舊邸を修理す、奇異なる轍を開きて目錄を取り出す	一二九	五 女一の宮犬宮をうむ、仲忠萬歳樂を舞ふ	一三八
二 仲忠目錄を母に示す	一三〇	六 仲忠母子琴を彈く	一四〇
三 仲忠二條大宮の院を賜はる	一三三	七 朱雀院より御消息あり	一四四
四 女一の宮懷妊、仁壽殿退出、産屋の準備	一三五	八 御乳付と御産湯	一四六
		九 三夜五夜の産養	一四九

藏 開（中）

- 一〇 七日の産養、あて宮より消息あり、涼の産養……………一五
- 一一 その夜の管絃……………一七
- 一二 贈物をかたがたにわかつ、兼雅夫妻の物語……………一六
- 一三 九夜の産養、かたがたよりの贈物……………一六
- 一四 その夜の管絃の御遊……………一七
- 一五 翌日人人退散、贈物……………一八
- 一六 仁壽殿より産養のものを朱雀院に奉る……………一八
- 一七 内侍のすけ、仲忠夫妻の前にて當代の男女を評す……………一七
- 一八 正頼参内産養のありさまを奏す……………一七
- 一九 祐澄あて宮を訪ふ、産養のうはさ……………一七
- 二〇 祐澄父母に對面、仲澄のために謁經……………一九
- 二一 犬宮五十日の祝……………二〇
- 二二 彈正宮大宮と御物語……………二〇
- 二三 仲忠女一の宮と物語る……………二〇
- 二四 正頼、大將を辭す……………二一
- 二五 仲忠右大將に兼任、参内、俊蔭の家集を進覽すべき勅をうく……………二二
- 二六 仲忠春宮にまゐる、春宮あて宮と仲忠の噂……………二八
- 二七 近衛づかさの祝宴……………三一
- 一 仲忠祖先の遺文を進覽し御前にて讀みあぐ……………三三
- 二 その夕方仲忠女一の宮に文を贈る……………三三
- 三 その夜主上仲忠に酒をすすめ、遺文よませて聞し召す……………三六
- 四 翌朝仲忠女一の宮文の贈答……………三六
- 五 仲忠文を女一の宮に贈る……………三六
- 六 仲忠、宮はたと語る……………三六
- 七 女一の宮仲忠文の贈答……………三六
- 八 仲忠涼ら殿上にて物語る、藤壺より贈物……………三六

- あり、女一の宮仲忠文の贈答……………三三六
- 九 俊蔭の集をよむ、後の宮聽問せらる……………三四〇
- 一〇 朱雀院春宮を召さる、仲忠に帶を賜ふ……………三四三
- 一一 仲忠梨壺に對面す……………三四五
- 一二 仲忠退出女一の宮に文をおくる……………三四八
- 一三 女一の宮洗髮、仲忠仁壽殿に勅言を傳ふ、
恩賜の帶を正頼に示す、正頼帶の來曆を
物語る……………三五〇
- 一四 今宮男子を生む、仲忠母に招かれてゆく……………三五三
- 一五 仲忠父と語る、梨壺懷妊のことを告ぐ、
父の妻妾らを一所に住ましむるやうす
む……………三五五
- 一六 仲忠一條殿へ使にゆく女房に果實を投げ
つけらる……………三五七
- 一七 仲忠復命果實の中の文兼雅の述懐、女三
の宮らを迎ふる準備……………三六〇
- 一八 涼の家の七夜の産養……………三六三

宇
津
保
物
語
三

宮
田
和
一
郎

凡 例

- 一、本書は宇津保物語の第三分冊である。
- 二、本書は慶長十五年三月十四日簡庵主道人の奥書ある寫本と、文化の補刻板本・國文大觀本・有朋堂文庫本・日本古典全集本とを参照しつつ、それらのよきに從つて本文を定めたものである。
- 三、註は本文の語句の右肩に附けた漢數字と照合するやうにした。
- 四、頭註は、註釋と校異とを混合して施してある。校異は主要なるものとどめ、いづれにしても誤りなること歴然たるものなどは、これを省略した。
- 五、頭註は出来るだけ簡略に従つたので、意をつくさない點があるかもしれない。しかし、宇津保物語にはまだ纏まつた註釋書がないのであるから、本書は特にその點に鑑み、將來この物語の讀解研究にすこしでも役だつやう力めた。
- 六、本文を適當に區分して段落を設け、句讀點を施し、漢字をあて、假名遣・送假名を統一して繙讀の便をはかつた。

七、畫詞の部分は、原本では本文中に續けて書いてあつて、一見區別が明瞭でないが、讀んで見ると見當

がつくのであるから、【畫詞】として、行を改め、二字下げて本文と區別しておいた。

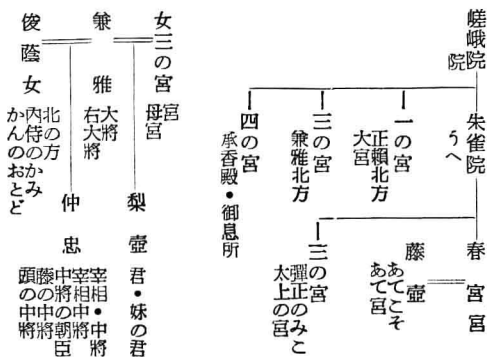
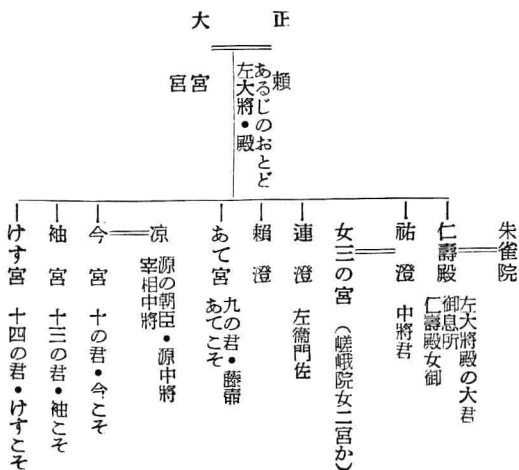
八、卷の順序は古來異説があつて一定しない。で、試みに年立を作つて検討してみた結果、本書の如くに定めたのである。

九、本書には、初秋（とばかりの名月・相撲の節會・内侍のかみ）・田鶴の村鳥（沖つ白浪）藏開（上）藏開（中）の四卷を収めた。

各巻にあらはれる人人

初秋

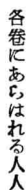
一名「とばかりの名月」
又「相撲の節會」
又「内侍のかみ」



左大臣季明
實 實
正 頼

致仕の大臣高基
伊豫の最手行經
馬の權の助國時
藤原仲政 權少將
正明 平中納言
兵衛の君 兵衛
行正 良少將
兵部卿親王
右大臣忠雅
下野の並則
内侍のすけ
平の維蔭
橘元行
仲頼
義則

兼
雅
左大將
大將のおとど・三條の大將
右大將・あるじの大將



宇津保物語

初はつ秋あき

一名「とばかりの名月」

又「相撲の節會」

又「内侍のかみ」

〔一〕〔二〕正賴邸。

〔三〕御馳走をめしあがつたりして。

〔四〕兼雅。

〔五〕役所が休みで家にひつこんでゐられたので。

〔六〕參内もせずひつこんでゐるので、おもしろくないなあ。正賴殿の所でも訪ねようかしら。あちらはこよりおもしろからう。さあ仲忠、三條殿へゆかう。

〔七〕仲忠。

〔八〕三條大宮の正賴邸。

〔九〕御直衣を召して、二人で同じ車にお乗りになる。

〔一〇〕格別仰仰しい前驅もつれずに正賴邸にまゐられた。

〔一一〕車から仲忠を先におろして。

〔一二〕私は今日役所のお休みで、家にひつこんでゐるのがつまらなくてやつて來ました。

〔一〕兼雅正賴を訪ふ、力士の噂、女文の優劣を論ず

かかるほどに、左大將殿の中なかのおとどに、君だち・上達部かんだちの・親王みくにたちあまたおはしまして、物聞ものきこし召しなどして、御物語し給ふほどに、右大將みぎ、その日御いとまにてこもりおはしければ、兼雅「今日けふうちへまゐらでこもり物すれば、むつかしう思ほゆるかな。左大將殿へやまうでまし。それはここにはまさりて興は思ほえむ。いざ中將ちゅうしやう、三條殿へ」と宣ひて、われも中將も、清げなる御直衣みちえ奉りて、一つ御車に奉る。近きほどなれば、殊ことなる所せき御前みづまへもなくてまうで給へり。まづ中將ちゅうしやうおろして、兼雅「こここゝに、今日いとまにてこもり侍るがむつか

- (二) 私も御同様つまらなくて、あなたの所へでもゆからかと思つてゐたところ、丁度よいあんばいでした。
- (三) 一同座席につかれた。
- (四) なま物に對するかんぶつ。
- (五) 正頼夫妻の住む御殿。
- (六) 米麥豆胡麻などの粉を餅にし、煮てあまつらをかけ、こねあはせて、細い竹筒の中に入れて固めた菓子で、切つてたべる。
- (七) お客たちに食膳を供した。

- (八) 右近衛府から召した力士たちはもう京に來てゐますか。七月の相撲の節會のために左右近衛府はことり使を遣はして諸國から相撲を召した。
- (九) 左近衛府から召した力士はまだ來ませんよ。
- (一〇) 例年やつて來る力士たちは多いのですが、今年といふ年はさう多くは参りさうありません。
- (一一) りつばな力士たちです。
- (一二) 相撲をとつたら、今年こそすこし見ばえのする相撲たちです。
- (一三) よい機會に見いだした相撲たちをつれて來たのですが實に立派なものです。

しきになむさぶらふ」と聞え給へり。左大將、正頼「正頼も、さなむ思ひ給へむつかりて、そなたにもまゐり來むと思ひ給へつるに、いとかしこし」と宣ひて、親王たち・上達部引きいで給へり。右大將おりて入り給ふ。皆おましに奉りぬ。かくておほん折敷さらにもいはず、千千に、白銀のかはらけ、菓子・乾物、いと清らにしてまゐらせ給ふ。北のおとどより、客人の御肴・大御酒まゐらせ給ふ。それにうちつぎて粉麴まゐり、おもものなどまゐらせ給ふ。

かくて御物語のついでに、あるじのおとど、正頼「右の相撲どもはもうで來にたりや。こなたのはまうで來ぬかな」兼雅「すこしはまうで來にためり。例の年ごろまうでのぼりくるをのこども、かず多かるを、今年はかすのごとくなむまうで來まじき年なめり。まうのぼりたるかぎりは、こともなきものどもなむある。かたちもいと清げにて、ただいまの力のさかりなるをのこどもにて、いとよし。なほ仕うまつらむに、すこし見どころある年の相撲どもになむある。例のまうでくるをのこども、あるは死に、あるは身の病ひなど侍りて、さるついでのものども奉りあげていとよき」左